

和歌

硯友會和歌(兼題)

若竹

わか竹の一節くゝに雨風をしのきてこそはいとゝ強かれ

全

世の外にすむ庵なれど竹の子のうきふしえけくなりける哉

全

今よりはいくその雪やしのくらむすなほに生ふる園のわか竹

全

夕されは庭のわか竹露れきて文讀むまとも涼しかりけり

全

笛にして君か代の歌かなつらん今年れひにし宿の若竹

曉起

窓の戸のあけ方近く眺むればえける若葉の心よきかな

全

袖ひちてもる手にむすふ水の面に有明の月の影をこそ見れ

起きいてゝむすふ清水に月すめは時ならず秋のけしきをそゝふ

涼しさはたとへん方もなつ艸の露吹きちらす曉のかせ

文苑

五十二

松

蘆

基

山

萬

松

蝶

古

露

月

紀

人

刀

露

二

人

全

東雲の明けゆく空の二つ三つ星のひかりに夜はふなれけり

全

今ははや夏のあつさにたへかたし朝とくたきてまなへわか友

全

夏の来て涼しきものは玉くしけあけゆく空のこゝろなりけり

砌下灌花

夕まくれ垣根の花に水うてはえはしなからも夏なかりけり

全

夏くれは水うちそゝく朝顔の花の上にもつとめありけり

螢漸多

なつもはや近つきぬらし夕まくれ草葉かくれに螢どふなり

全

夏もはや盛なりけりよなくにあし夏の螢かすのそひゆく

全

みたれ飛ふ螢の数もなつ艸の緑とともにまさりゆくかな

全

小山田の早苗のふらし夕されは澤邊の螢さはにとひかふ

襖

山

江

松

蘆

松

蝶

蘆

山

川

人

楠

露

月

露

二

月

人

評曰、しらへたし

梅子垂枝(即題)

白妙にはほふのみかは梅の花ちりし後にも實は結ひけり

評曰、めてたし

新 樹(全)

ほどゝきすまはなく聲もゝれぬまでまけりあひたる夏木立哉

全

ゆふ月夜わか葉かもとに我くれは露の玉ちるこゝちこそすれ

全

ゆく人のよすかど今はなりぬなり日にまけりゆく門の青桐

山 吹

露をたもみ川邊にたるゝ山吹のまたゆく水に花のみたるゝ

つゝし

岩つゝし咲きにけらしな龍田山夕くれなるの色に見えけり

あやめ

わかやどのあやめ生ひけりかみつけのいかほの沼のいかにあるらん

蘆 月

基 紀

萬 古 刀

基 紀

やまひと